

宗教性とスピリチュアリティ及び主観的幸福感の関連 —大学生と高齢者の比較—

小林照典¹・宮本邦雄²

(1: 岐阜市教育委員会, 2: 東海学院大学)

要 約

本研究の目的は、高齢層と青年層の宗教性が主観的幸福感に及ぼす影響を検討することであった。また、青年層と高齢層とで異なる様相を示す宗教性を宗教観、宗教行動とスピリチュアリティに分けて検討した。その結果、青年層では、「主観的幸福感」にスピリチュアリティの「未来期待」、宗教観の「宗教肯定」が正の影響を与え、スピリチュアリティの「輪廻転生」が強い負の影響を与えていることが示された。宗教を肯定することで主観的幸福感が向上するということが推察された。高齢層では、「主観的幸福感」にスピリチュアリティの「人生の意味」が正の影響を与えることがみとめられ、自分の人生の意味を考えることで主観的幸福感が向上することが推察された。また、青年層と異なり、主観的幸福感が宗教観、宗教行動及びスピリチュアリティを促進することが示唆された。

キーワード：宗教観、宗教行動、スピリチュアリティ、主観的幸福感

(2019. 9. 12 受稿 査読審査を経て 2019. 11. 15 受理)

問題と目的

1. 宗教・信仰の現状

本研究は、宗教に対する態度や行動が精神的健康に及ぼす影響の世代による違いを検討することを目的とする。まず青年層と高齢者層の宗教と信仰の現状を概観したい。

昔から日本ではお盆に墓参りをしたり、年明けに初詣に行ったりなど、伝統的な仏教や神道を中心とした信仰体系が存在するとされる(金児,2004)。しかし現在、バレンタインやハロウィン、クリスマスなどの行事が一般化しており、若者たちを中心に宗教的意味の薄い宗教的行動が見られる。

NHK 放送文化研究所(2009)による全国 16 歳以上の 1800 人を対象とした調査の結果、宗教を信仰している人は 39%であったが、宗教を信仰していない人は 49%で、宗教を信仰する人を上回っていた。年齢別では、男性は、16～49 歳までは宗教を信仰する人は 20%以下と低いが、50～59 歳になると 41%にまで増え、60 歳以上になると 56%を占めた。一方、女性では、16～29 歳 20%だが、30～39 歳 28%、40～49 歳 39%と男性よりも宗教を信仰する人の割合が高くなっていた。しかし、50～59 歳 43%、

60 歳以上 56%で、性差がみられなかった。信仰率の低い青年は宗教とは無縁のように思えるが、宗教的行動を行っていないわけではない。多くの青年が「よくする」宗教的な行動は、「墓参り」は 66%、「初詣」は 55%であった。「墓参り」や「初詣」は、宗教を信仰していない人にも広く浸透しており、世代間の大きな差は見られなかった。

金児(1997)によると、宗教とは、「超越的存在と関係する信念と実践の統一された体系である」と定義している。宗教を信念(態度)と実践(行動)の体系と定義することによって、宗教を社会心理学の研究対象として位置づけることができる。

金児(2003)は、宗教に対するイメージについて、大学生とその両親、高齢者を対象に自由記述による調査を行った。その結果、「宗教は、それを信じる以上は深く関わらなければ意味がない」という積極的肯定論と、「宗教は、それに深く関わるのはもちろん、“たしなむ”必要もないものだ」という積極的否定論は 3 世代とも 20%以下という低い割合を示したのに対し、「宗教は、それを信じて深く関わるよりも、“たしなむ”程度がよい」という消極的肯定論が 3 世代とも 60%以上という高い割合を示した。

さらに金児(2003)は、宗教的態度について、大学生とその両親を対象に宗教観尺度(金児, 1997)を用いた質問紙調査を行った。その結果、「向宗教性」、「加護観念」では両親の方が子どもよりも高く、「靈魂観念」では子どもの方が高い結果となった。また、「靈魂観念」に性差が認められ、女性は男性よりも「靈魂観念」が強いことが示された。

また、小川(2012)は、大学生を対象に宗教性と生き方の関連について探索的に検討した。その結果、信仰については、無信仰が全体の約 58%, 仏教系が約 36%, 新宗教系が約 3%, キリスト教系が約 2%であった。宗教行動については、「現世利益的行動」は、初詣に行く 76.6%, 身の安全や商売繁盛、安産、入試合格などを祈願にいったことがある 73.6%, お守りやお札など縁起物を自分の身の回りにおいている 66.6%となり、全てにおいて半数以上の人が選択していた。「慰霊的行動」は、お墓参りをしている 85.0%, 仏壇にお花やお仏飯をそなえる 74.7%, 先祖や亡くなった肉親の霊をまつる 69.2%, 神棚にお花や水をそなえる 60.8%, 決まった日に神社やお地蔵さんなどにお参りに行く 37.3%, 折にふれ、おつとめをしている 10.2%であった。「自己修養的行動」は、聖典や経典など、宗教関係の本を折にふれ読む 12.1%, 宗教に関する新聞やパンフレットを読む 9.2%, 普段から礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている 8.1%, 奉仕グループに参加している 5.9%, 信仰グループに参加している 5.5%であった。信仰者の方が無信仰者よりも生き方の価値観が積極的・肯定的であることが示唆された。

以上の諸研究から、宗教信仰の現状については、青年層よりも高齢層の方が信仰に厚いが、青年層も「墓参り」や「初詣」などの宗教的行動を活発に行うといえる。

NHK 放送文化研究所(2011)による宗教意識や宗教的行動の調査結果から、男性においてはおみくじ・占いをしたことがある人が若い年齢層で増加し(10 歳代 32%, 20 歳代 43%, 30 歳代 32%, 40 歳代 29%, 50 歳代 20%, 60 歳代 13%, 70 歳代 9%), 女性においては奇跡を信じている人が、若い年齢層で増加しており、年齢間の差が拡大したことを示した(10 歳代 48%, 20 歳代 37%, 30 歳代 31%, 40 歳代 25%, 50 歳代 17%, 60 歳代 8%, 70 歳代 5%)。また、占いや奇跡にはブームがあり、時代によって流行り廃りがあるが、若い人々では信じる人が徐々に増えている。すなわち、高齢層の方が宗教の信仰率が高いが、青年層も宗教的行動を行っており、占いや奇跡などを信じるスピリチュアルな行動を行う割合は、

高齢層よりも青年層の方が高いことがわかる。

また、川上・小城・坂田(2010)は、心霊現象や占い、宇宙人・UFO、超能力、神仏の存在など、現在の科学ではその存在や効果が立証されていないが人々に信じられている現象を総括して不思議現象と定義した。そして、大学生を対象に不思議現象を信奉するかしないについて検討した。その結果、男性よりも女性の方が、血液型、占い、霊の存在において、信奉率が高いことが示された。

以上の結果より、高齢層よりも青年層の方でスピリチュアル行動が多く、男性よりも女性の方でスピリチュアル行動が多いことが示された。

2. 宗教性とスピリチュアリティ

次に、宗教的態度や宗教的行動の測定と宗教性とスピリチュアリティの概念に関する先行研究を概観し、本研究のアプローチについて述べる。

金児(1993)は、向宗教性(一般的な意味で宗教に対して肯定的な態度を示すのか、あるいは否定的な態度をとるのか)と民族宗教性からなる宗教性尺度を作成し、後者の下位尺度として靈魂観念(霊的存在への信仰、死者への畏怖の念)、加護観念(神仏の加護が人間に働いた結果に対する感謝とそれへの信頼の情)、個人主義的宗教(宗教の私化現象)、近代合理主義(科学と宗教の対立)を抽出した。さらに青年とその親の宗教的態度を調査し、靈魂観念では、父親と娘との間に世代間の断絶が存在する可能性が示唆された。また、子ども、特に女子は両親に比べて霊界を志向する宗教観が強いことが明らかにされた。

松島(2005)は、宗教意識の構造を明らかにするために、ホーリネス系教会を研究対象とし、その教会に関わる日本人クリスチャンの宗教意識尺度を作成した。その結果、信念、体験、共同体、効果報酬、効果責任の 5 因子が抽出された。また、尺度の信頼性と妥当性も確認された。さらに、松島(2016)は、宗教性は、個人における宗教への関与・傾倒の程度を示す概念であるとしている。すなわち、宗教性とは、「個人がどの程度宗教に関与しているか」を測る指標であり、個人が宗教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか(宗教意識)」、「振る舞うのか(宗教行動)」を表している。宗教性を「個人の特性」として捉えることにより、宗教教団への志向性やスピリチュアルなものの志向性など、それぞれの領域に対する志向の「個人差」を捉えることができる。すなわちある宗教の信仰の有無という捉え方よりも、宗教観や宗教行動の程度から宗教性にアプローチするほうが研究しやすいと

考えられる。

タカハシ(2016)によると、スピリチュアリティと宗教性の境界線は未だに不鮮明であり、多くの場合、スピリチュアリティは宗教性と同意語として扱われてきた。最近では米国の20%以上が自分のことを「宗教的ではないがスピリチュアルである」と認識しており、特に富裕層、教育水準の高い人々の間で、スピリチュアリティと宗教性は質の違う概念として理解されているとしている。

上田(2014)は、スピリチュアリティ全般の特徴を指摘した。すなわち、①現実的な「今このとき」を主眼に置き、今生での気づきを重視する。②目的は「救い」ではなく、「癒し」や「幸福」である。③重要なのは、気づきという「知」であり、「信(信仰, 信心)」に至る必要はない。また、スピリチュアリティ最大の特徴として「柔軟さ」を挙げている。例えば、宗教のような「信仰対象の限定, 信仰心の永続性, 修行の義務化」がなく、信仰に伴うあらゆる制約が取り除かれており、誰でも自由にスピリチュアリティに触れることができると考えている。

また、具志堅(2010)は、スピリチュアリティの概念を「合理性だけではとらえられない超自然的な力をさまざまな形で感知し、それと関わったり、あるいはそれを基礎に人生を生きようとする営み」と定義している。さらに、具志堅(2009,2011)、具志堅・下家(2010)は、「スピリチュアリティ的信念尺度」を作成した。そこでは、「人生の意味」(人生で直面する出来事は単なる偶然によって生じるのではなく、何らかの意味や必然性がある生じる)、「因果応報」(人の行動は、良いことも悪いことも最終的にはその人に戻ってくる)、「心象の現実化」(人が心で思ったことは、実際の出来事として現実化する)、「輪廻転生」(前世や来世が存在する)、「神による守護」(人は、神様によって守られている)、「魂の永続性」(体が死んでも魂は存在し続ける)という6つの側面に焦点を当てている。

本研究では、宗教性を宗教に対する態度・意識と宗教行動からなるとし(松島, 2016)、具志堅(2010)と同様に、スピリチュアリティを「合理性だけではとらえられない超自然的な力をさまざまな形で感知し、それと関わったり、あるいはそれを基礎に人生を生きようとする営み」と定義する。

3. 宗教性及びスピリチュアリティと精神的健康

歴史を振り返ってみると、社会に不安が遷延する時期

には宗教が興隆し、種々の宗教や宗派が起こってきたことがわかる(玄侑, 2014)。また、個人の生涯発達の段階において、苦境にある時や心身の不安定な時期には、宗教的行動が活性化したり、信心深くなったりすることを体験する。このように人の心の安寧と宗教とは関連があると考えられる。

国際保健機関(World Health Organization : WHO)では、1998年に健康を定義する概念の1つとして「スピリチュアリティ」を加えることが提案された。最終的に健康概念は改訂されていないものの、「スピリチュアリティ」は、人間の尊厳の確保や生活の質を考えるために必要で、本質的なものだという観点から、新たに提案されたと言われている。また、近年、米国を中心に禅宗から生まれたマインドフルネスという認知療法が脚光を浴びており、座禅やヨガを援用した技法が心理療法の1つとして有用性が示されている(ガバットジン, 2007)。マインドフルネスとは、「今、この瞬間の体験に意図的に意識を向け、評価をせずに、とらわれのない状態で、ただ観ること」と定義されており、その精神的健康の促進効果が報告されている。例えば、伊藤・安藤・勝倉(2009)は、禅的瞑想プログラムを用いた4週間の集団トレーニングによって、抑うつ傾向の軽減と思考抑制の減少や破局的思考の緩和、理性的思考と感情的思考のバランスの回復などポジティブな効果をもたらすことを報告した。また、宇佐美・田上(2012)は、大学生を対象にマインドフルネスと抑うつとの関連を検討した。その結果、マインドフルネス低減療法等で抑うつの低減効果をもたらす結果が得られた。

宗教観や宗教実践と精神的健康の関連も報告されてきた。松島・小林・宮下(2014)は、仏教系新宗教への関与が、中高年の信者の不安および主観的幸福感に及ぼす影響を検討した。法座と呼ばれる宗教的実践を実施する10日前、7日後、38日後の計3回質問紙調査を実施した。その結果、法座実施後1週間については主観的幸福感が高まることがみられた。一方、西沢(1998)は、宗教心理と心理的ウェルビーイングとの関連について検討し、宗教意識の高群は、「好調精神状態」、「人間関係サポート」、「学業サポート」などの得点が高く、「不調精神状態」の得点が低いことが認められた。宗教意識の高いグループは、良好なウェルビーイングを示すことがわかった。

スピリチュアリティについては、具志堅・松島・平子・徳野・相澤・酒井(2013)が、「スピリチュアル現象尺度」を作成し、精神的健康との関連について検討した。「心象

の現実化」,「因果応報」,「人生の意味」の3因子のうち,「人生の意味」が男性においてのみ有意な正の効果がみとめられた。男性では,人生で直面する出来事は偶然ではなく,何らかの必然性において生じると考える傾向が強いほど,精神的健康は良好であるといえる。

鈴木(2002)によれば,従来の青年期における精神的健康に関する研究では,「いかに精神的に不健康か」という観点から検討されてきた。「いかに精神的に健康か」という肯定的な側面に注目した研究を進めなければ,精神的健康概念の全体像を把握することはできず,教育現場への有益な提言という面からも限界があることを指摘している。

以上の先行研究をふまえ,本研究は,青年層と高齢層の宗教観,宗教的行動及びスピリチュアリティが主観的幸福感に及ぼす影響を検討することを目的とする。高齢層と青年層とで異なる様相を示す宗教性を宗教観とスピリチュアリティに分けて検討する。また,精神的健康の指標として,鈴木(2002)の議論を踏まえポジティブな健康の側面を取り上げ,主観的幸福感を用いることとした。

以下の仮説を設定した。①青年層はスピリチュアリティの得点が高く,スピリチュアリティが主観的幸福感を促進する。②高齢者は,宗教観と宗教行動が主観的幸福感を促進する。また,「宗教観」,「宗教行動」,「スピリチュアリティ」によって,調査対象者をクラスタ分析によって分類し,タイプ間の主観的幸福感を比較検討する。

方法

調査対象者

東海地方の大学生156名(男性:93名,平均年齢19.63歳, $SD=1.29$,女性:63名,平均年齢19.35歳, $SD=1.26$),高齢者148名(男性:65名,平均年齢72.51歳, $SD=7.07$,女性:83名,平均年齢73.52歳, $SD=8.11$)を対象に調査を行った。

調査時期と調査方法

調査は2017年2月から6月に実施した。大学生には,講義終了後等に学生に対して,研究の主旨及び参加が任意であること,個人情報の保護と修士論文の研究であることをフェイスシートと口頭により説明を行い,調査参加の同意が得られた者に限り,調査用紙への回答を求めた。高齢者には,家庭訪問あるいはイベントに参加した

際に,同様の倫理的配慮を説明し,同意を得ることができた者に対して調査用紙と説明書を渡し,調査への協力を求めた。

質問紙内容:

- ① スピリチュアリティ現象尺度:具志堅他(2013)が作成した尺度を用いた。「心象の現実化」,「因果応報」,「人生の意味」の3つの下位尺度からなり,13項目に5件法での回答を求めた。
- ② 宗教性尺度:金児(1993)が作成した尺度を用いた。「向宗教性」,「民族宗教性」(「靈魂観念」,「加護観念」,「個人的宗教」,「近代の合理主義」)の5つの下位尺度からなり,27項目に6件法での回答を求めた。
- ③ 宗教心理項目:西沢(1998)が作成したものをを用いた。宗教行動・宗教文化からなり,11項目に2件法での回答を求めた。
- ④ 主観的幸福感尺度:伊藤・相良・池田・川浦(2003)が作成した尺度を用いた。「人生に対する前向きな気持ち(満足感)」,「自信」,「達成感」,「人生に対する失望感,至福感」からなり,15項目に4件法での回答を求めた。

なお,本研究は東海学院大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を受けている(ID番号:2016-25)

結果

1. 各尺度の因子分析

調査協力者の負担を考慮し,各尺度とも原尺度からいくつかの項目を削除した。そのため,各尺度について因子分析(主因子法,プロマックス回転)を行い,因子構造の確認を行った。なお,宗教行動は西沢(1998)の尺度をそのまま使用したが,項目11が α 係数を低めていたため削除した(表1, $\alpha=.66$)。

主観的幸福感尺度については,伊藤ら(2003)の因子構造と同様,人生を楽しんでいる「満足感」($\alpha=.83$),問題に対処できるという「自信」($\alpha=.76$),これまで諸課題をうまく達成してきたという「達成感」($\alpha=.73$),人生の意味を感じている「希望」($\alpha=.68$)の4因子が抽出された(累計説明率=63.97%)。

宗教観尺度については,金児(1993)とやや異なる4因子が抽出された(累計説明率=67.3%)。すなわち,宗教

の重要性を感じている「向宗教性」($\alpha=.93$), 寺社や宗教行事を重要とする「霊魂観念」($\alpha=.93$), 死後の世界に信心をもつ「輪廻転生」($\alpha=.75$), 宗教の意味を重視する「宗教肯定」($\alpha=.63$)という因子構成となった。

スピリチュアルリティ尺度については, 具志堅ら(2013)と同様3因子が抽出された(累計説明率=69.4%)。

第1因子は人生の種々の出来事に意味をみつける「人生の意味」($\alpha=.85$), 第3因子は心の中での強い思いはかなうという「心象の現実化」($\alpha=.77$), 第2因子は原尺度と異なり, 将来へのポジティブな思いが重要であると感じる内容であったため原尺度の「因果応報」ではなく「未来期待」($\alpha=.84$)とした。

表1.宗教行動の質問項目

宗教行動 $\alpha=.66$	
5	この1、2年間に、身の安全や商売繁盛、入試合格など祈願しに行ったことがある
6	初詣をしたり、決まった日に神社やお寺にお参りする
8	この1、2年の間に、おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある
1	聖書、経典など宗教関係の本を、おりにふれて読んでいる
2	死後の世界に関する本を読んだことがある
3	おりにふれて、お祈りやお勤めをしている
4	年に1、2回程度は墓参りしている
7	お守りやおふだなど、魔よけや縁起ものを自分の身のまわりにおいている
9	この1、2年間に、宗教団体の主催する奉仕活動に参加したことがある
10	この1、2年間に、宗教とは関係なく奉仕活動をしていたことがある

表2.主観的幸福感の因子分析

項目	1	2	3	4
満足感 $\alpha=.83$				
2. 過去と比較して、現在の生活は幸せと感じていますか	.897	-.007	-.061	.057
3. ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	.812	.085	-.061	.022
1. あなたは人生が面白いと思いますか	.682	-.132	.113	-.127
14. 非常に強い幸福感を感じる瞬間がありますか	.559	.050	.035	-.032
15. 自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じることがありますか	.423	.089	.074	-.048
自信 $\alpha=.76$				
5. 危機的な状況(人生を狂わせるようなこと)に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか	.021	.742	-.023	.063
4. ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか	.161	.673	-.066	.034
6. 今の調子でやっていけば、これから起きることにも対処できる自信がありますか	.097	.593	.205	.068
11. 将来のことが心配ですか	.144	-.535	.083	.271
13. 自分のまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部であるという所属感を感じることがありますか	-.064	.400	.119	-.093
達成感 $\alpha=.73$				
7. 期待通りの生活基準や社会的地位を手に入れたと思いますか	-.002	-.027	.816	.053
8. これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか	.027	.057	.666	-.060
希望 $\alpha=.68$				
10. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか	-.008	-.051	-.011	.837
12. 自分の人生には意味がないと感じていますか	-.337	.021	.034	.437

宗教性とスピリチュアリティ及び主観的幸福感の関連

表3. 宗教観の因子分析結果と信頼性の検討

項目	1	2	3	4
向宗教性 $\alpha = .94$				
2. 信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方である	.905	-.239	.033	-.023
5. 宗教心のない人は、心の貧しい人である	.873	-.127	-.047	.106
7. 信仰をもっていれば、死に直面しても安らぎの気持ちを持つことができる	.724	.013	.137	-.010
19. 宗教は心身のよい修養になる	.721	.295	-.102	.085
18. 宗教によって、自己の存在の意味が教えられる	.705	.010	.186	-.023
24. よい生活を送るためには、何らかの宗教的信仰が必要である	.657	.146	.131	-.009
26. どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せにはなれない	.634	.105	.080	-.080
3. 宗教は、社会の道徳を確立し、維持していくのに必要である	.619	.338	-.196	.034
1. 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる	.540	.246	-.067	-.130
靈魂観念 $\alpha = .93$				
6. 氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である	.036	.889	-.193	.035
16. 冠婚葬祭を円滑に行うために宗教は必要である	-.003	.776	.025	.069
13. 神社の境内にいと心が落ちつくことがある	-.113	.766	.096	-.043
23. お盆などのむかしからの宗教的行事には親しみを感ずる	.039	.737	.075	.006
27. お寺、神社、教会などから安心感を得ることができる	.042	.679	.161	-.081
21. 水子供養はすべきである	-.009	.661	.080	.118
9. 先祖崇拝は美しい風習である	.280	.637	-.072	-.023
8. 観音さんやお不動さんに親しみを感ずる	.307	.532	.006	-.064
15. 山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある	-.059	.511	.331	-.015
25. 神や仏を粗末にすると、ばちがあたると思う	-.049	.477	.357	.030
輪廻転生 $\alpha = .76$				
10. 死後の世界はあるように思える	-.026	-.019	.804	-.083
22. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ	.099	-.020	.657	.029
11. 死者の供養をしないとたたりがあると思う	.004	.081	.607	.129
宗教肯定 $\alpha = .63$				
12. 宗教を信じてても何の利益もない	.072	-.085	.052	.837
17. 宗教が人生の意味を明らかにしてくれることはない	-.057	.187	.003	.611

表4. スピリチュアリティの因子分析結果と信頼性の検討

項目	1	2	3
人生の意味 $\alpha = .85$			
4. 人生の挫折や行きづまりには、そこから学ばなければならない「何か」があるのです	.891	-.083	-.010
8. 人生で直面する出来事は、良いことも、つらいことも、何かの意味や必要性があって生じることです	.859	-.010	-.078
9. 人の行動は、良いことも悪いことも最終的にはその人に戻ってきます	.480	.272	.076
10. 人生で起こる出来事や、人との出会いは、あなたが人間として必要なことを学び、成長するために、見えない縁によってやってきます	.468	.331	.012
未来期待 $\alpha = .84$			
11. 積極的に明るいことを考えれば、その思いは叶い、幸福を手にすることができます	.016	.833	-.077
13. 良いことが起こると期待している心には、良いことを引き寄せる力が働きます	-.001	.777	.023
12. 良いことも悪いことも、何かしたことにはいつかどこかで、それに見合った結果が現れます	-.017	.743	.097
心象の現実化 $\alpha = .78$			
3. 人が心で思ったことは、実際の出来事として現実化します	-.108	-.016	.884
5. あなたが心で思ったことは、現実となって現れてくるものです	.118	-.098	.762
6. 人が行った行為はやがて必ずその人自身にはね返ってきます	.186	.214	.487
7. 「こうなったらいやだな」という不安感を強くいだと、その思いは現実化してしまいます	-.081	.080	.409

表5 青年層と高齢層の記述統計

	青年層				高齢層			
	男性		女性		男性		女性	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
宗教行動	13.6	2.18	13.6	1.76	15.0	2.15	16.0	1.62
主観的幸福感	36.7	7.67	36.0	6.55	40.4	5.42	40.3	5.34
満足感	14.0	3.45	14.0	2.76	14.9	2.41	15.3	2.22
自信	12.4	2.98	11.8	2.49	14.1	2.09	13.6	2.38
達成感	4.9	1.43	4.8	1.44	5.3	1.13	5.2	1.14
希望	5.3	1.73	5.4	1.40	6.2	1.06	6.2	1.17
向宗教性	25.0	8.23	26.4	6.95	35.2	8.07	37.3	6.46
靈魂観念	33.0	10.66	35.3	8.66	42.2	7.99	45.8	6.20
輪廻転生	9.4	3.82	10.4	2.59	9.4	3.29	10.7	2.94
宗教肯定	6.9	2.48	7.4	1.69	7.9	2.07	7.8	1.85
人生の意味	14.5	4.03	14.4	3.04	15.3	2.70	16.1	2.98
未来期待	10.3	3.12	10.6	2.32	10.9	1.95	11.2	2.27
心象の現実化	13.5	3.67	13.1	2.56	13.2	2.46	12.9	3.15

2. 各尺度の記述統計

表5に各尺度の年代別と性別の平均と標準偏差を示した。

年代間と性別を比較するために、各尺度について、年代(2)と性別(2)による2要因の分散分析を行った。

年代間では、「宗教行動」($F(1,227)=52.121, p<.001$), 「主観的幸福感」($F(1,227)=20.316, p<.001$), 「満足感」($F(1,227)=7.83, p<.001$), 「自信」($F(1,227)=25.102, p<.001$), 「達成感」($F(1,227)=4.395, p<.05$), 「希望」($F(1,227)=16.341, p<.001$), 宗教観の「向宗教性」($F(1,227)=107.498, p<.001$), 「霊魂観念」($F(1,227)=68.67, p<.001$), 「宗教肯定」($F(1,227)=6.348, p<.05$), スピリチュアリティの「人生の意味」($F(1,227)=7.492, p<.001$)に有意な主効果が見られた。いずれも高齢層の方が青年層よりも高い得点を示した。

性別では、宗教観の「霊魂観念」($F(1,227)=5.929, p<.05$), 「輪廻転生」($F(1,227)=6.543, p<.05$)に有意な主効果が見られ、男性より女性の方が高い得点を示した。なお交互作用はいずれも有意ではなかった。

3. 年代別の尺度間の相関係数

年代別に尺度間の相関分析を行った(ピアソンの積率相関係数)。青年層では(表6), 「主観的幸福感」と宗教観の「宗教肯定」, スピリチュアリティの「人生の意味」, 「未来期待」に弱い正の相関が見られた。また、主観的

幸福感の下位尺度の「満足感」及び「自信」と宗教観の「宗教肯定」, スピリチュアリティの「人生の意味」, 「未来期待」, 「心象の現実化」に正の相関が見られた。

高齢層では(表7), 「主観的幸福感」と「宗教行動」, 宗教観の「向宗教性」, 「霊魂観念」, 「宗教肯定」, スピリチュアリティの「人生の意味」, 「未来期待」, 「心象の現実化」に正の相関が見られた。主観的幸福感の「満足感」は、「宗教行動」と宗教観, スピリチュアリティの全下位尺度において正の相関が見られた。また、主観的幸福感の「自信」及び「達成感」と宗教観の「向宗教性」, 「宗教肯定」, スピリチュアリティの全下位尺度に正の相関が見られた。青年層と高齢層を比較すると、青年層では「主観的幸福感」と「宗教行動」や宗教観各尺度の間には有意な相関が見られないが、高齢層に多くの正の相関が見られるという違いが認められた。

表6. 青年層の相関分析

	宗教観				スピリチュアリティ			
	宗教行動	向宗教性	霊魂観念	輪廻転生	宗教肯定	人生の意味	未来期待	心象の現実化
主観的幸福感	.066	-.041	-.094	-.132	.269**	.197*	.274**	.158
満足感	.087	-.044	-.063	-.080	.275**	.174*	.256**	.183*
自信	.039	-.075	-.102	-.121	.246**	.198*	.299**	.222**
達成感	-.033	.087	.012	-.078	.044	.049	.033	.015
希望	.057	-.048	-.122	-.150	.189*	.152	.156	-.012

* $p<.05$ ** $p<.01$

表7. 高齢層の相関分析

	宗教観				スピリチュアリティ			
	宗教行動	向宗教性	霊魂観念	輪廻転生	宗教肯定	人生の意味	未来期待	心象の現実化
主観的幸福感	.277**	.271**	.237**	.059	.222*	.336**	.366**	.315**
満足感	.295**	.385**	.320**	.218*	.184*	.327**	.393**	.353**
自信	.226**	.219*	.168	-.027	.191*	.308**	.316**	.263**
達成感	.143	.190*	.111	.002	.248**	.154	.231**	.165*
希望	.155	-.078	.048	-.075	.052	.227**	.135	.094

* $p<.05$ ** $p<.01$

4. 宗教観, スピリチュアリティ, 宗教行動と主観的幸福感の関連

宗教観及びスピリチュアリティの主観的幸福感に及ぼす影響

「主観的幸福感」を従属変数, 「宗教行動」, 宗教観の「向宗教性」, 「霊魂観念」, 「輪廻転生」, 「宗教肯定」, スピリチュアリティの「人生の意味」, 「未来期待」, 「心象の現実化」を独立変数として, 青年層と高齢層別に重回帰分析を行った。

青年層では, 「主観的幸福感」($R^2=.171$) に及ぼす「輪廻転生」に中程度の負の影響 ($\alpha=-.365$), 「宗教肯定」($\alpha=.187$), 「未来期待」($\alpha=.312$) には正の影響が認められた(表 8)。また, 「満足感」においては($R^2=.156$), 「輪廻転生」に中程度の負の影響 ($\alpha=-.305$), 「宗教肯定」($\alpha=.215$), 「未来期待」($\alpha=.301$) に正の影響が認められた。「自信」に及ぼす($R^2=.154$), 「未来期待」($\alpha=.303$) の正の影響, 「希望」に及ぼす($R^2=.154$),

「輪廻転生」($\alpha=-.330$) と「心象の現実化」($\alpha=-.304$) に負の影響, 「宗教肯定」($\alpha=.187$) に正の影響が認められた。

一方, 高齢層では, 主観的幸福感の「自信」($R^2=.154$) に及ぼす「人生の意味」($\alpha=.340$) に正の影響がみられたのみであった(表 9)。

主観的幸福感が宗教観, スピリチュアリティ, 宗教行動に及ぼす影響

高齢者の宗教性及びスピリチュアリティと主観的幸福感の各尺度間に正の相関が多くみられたことから, 両者の因果関係を逆に設定し, 主観的幸福感の下位尺度を独立変数として宗教観とスピリチュアリティへの重回帰分析を行った。

青年層では, 「宗教肯定」($R^2=.120$) に「満足感」($\alpha=.235$) が正の影響, 「達成感」($\alpha=-.201$) が負の影響, 「未来期待」($R^2=.121$) 対して「自信」($\alpha=.278$) が正の影響を示した(表 10-1,2)。

表 8 青年層の主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析

	満足感	自信	達成感	希望	主観的幸福感
宗教行動	.084	.005	-.041	.052	.047
向宗教性	.013	-.057	.155	.067	.046
霊魂観念	.163	.096	.128	.067	.134
輪廻転生	-.305*	-.231	-.284	-.330*	-.365**
宗教肯定	.215*	.144	.058	.187*	.187*
人生の意味	-.066	-.056	.067	.163	.019
未来期待	.301*	.303*	-.024	.237	.312*
心象の現実化	-.027	.078	.025	-.304*	-.072
R^2	.156**	.154**	.044	.154**	.171**

* $p<.05$, ** $p<.01$, * ** $p<.001$

表 9 高齢層の主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析

	満足感	自信	達成感	希望	主観的幸福感
宗教行動	.104	.124	.111	.119	.151
向宗教性	.280	.078	.267	-.265	.140
霊魂観念	.154	.066	-.156	.285	.135
輪廻転生	.051	-.196	-.147	-.031	-.105
宗教肯定	.018	.086	.221	.081	.105
人生の意味	-.022	.340*	.068	.180	.173
未来期待	.105	-.033	.132	-.066	.042
心象の現実化	.022	.062	-.099	-.019	.026
R^2	.303***	.219**	.154	.039	.245**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

宗教性とスピリチュアリティ及び主観的幸福感の関連

一方、高齢者では、「向宗教性」($R^2=.244$)、「靈魂觀念」($R^2=.124$)、「輪廻転生」($R^2=.118$)に対して「満足感」が中程度の正の影響(順に $\alpha=.532, .403, .440$)、「宗教行動」($R^2=.096$)、「人生意味」($R^2=.128$)、「未来期待」($R^2=.169$)、「心象現実化」($R^2=.131$)に正の影響を示した(順に $\alpha=.280, .220, .353, .331$)。また、「向宗教性」($R^2=.244$)と「輪廻転生」($R^2=.118$)に及ぼす「希望」の負の影響がみられた(順に $\alpha=-.363, -.225$, 表 11-1,2)。

表10-1 青年層の従属変数を宗教行動と宗教観とした重回帰分析

満足感	向宗教性	靈魂觀念	輪廻転生	宗教肯定	宗教観
主観的満足感	-.055	.020	.083	.235*	.067
自信	-.115	-.115	-.106	.160	-.114
達成感	.185	.071	-.062	-.201*	.046
希望	-.030	-.099	-.117	.091	-.088
R^2	.030	.022	.029	.120	.016

* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$

表10-2 青年層の従属変数を宗教行動と宗教観とした重回帰分析

満足感	宗教行動	人生の意味	未来期待	心象現実化	スピリチュアリティ
主観的満足感	.131	.072	.171	.206	.165
自信	.001	.168	.278**	.219*	.243*
達成感	-.082	-.069	-.164	-.189	-.155
希望	.003	.062	.003	-.122	-.019
R^2	.013	.051	.121	.084	.093

* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$

表11-1 高齢層の宗教行動と宗教観を従属変数とした重回帰分析

主観的幸福感	向宗教性	靈魂觀念	輪廻転生	宗教肯定	宗教観
満足感	.532***	.403***	.440***	.124	.603***
自信	.025	.039	-.178	.038	.047
達成感	.045	-.052	-.020	.190	-.010
希望	-.363***	-.152	-.225**	-.071	-0.273**
R^2	.244	.124	.118	.073	.285

* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$

表11-2 高齢層の宗教行動と宗教観を従属変数とした重回帰分析

主観的幸福感	宗教行動	人生の意味	未来期待	心象現実化	スピリチュアリティ
満足感	.280*	.220**	.353***	.331***	.338***
自信	.069	.169	.137	.111	.167
達成感	-.005	-.057	.014	-.004	-.033
希望	-.019	.077	-.090	-.087	-.037
R^2	.096	.128	.169	.131	.172

* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$

5. 宗教性, スピリチュアリティ, 宗教行動によるクラスター分析

「宗教行動」, 「宗教観」, 「スピリチュアリティ」によって, 調査対象者がどのように分類されるかを階層クラスタ分析(Ward 法)で検討した。その結果, 宗教観が最も高く, 他の得点も高い宗教肯定群($N=40$), 全ての尺度得点が 0 に近い無関心群($N=160$), 宗教観が最も低く, 他の得点も低い宗教否定群($N=38$)の 3 つのクラスターに分類された。

世代間で度数に相違があるのかを検討するために, 年代(2)×クラスター(3)の χ^2 検定を行った結果, 年代によるクラスター間の人数に有意な偏りが見られた(表 12, $\chi^2(2)=60.019, p<.01$)。残差分析の結果, 青年層では, 宗教肯定群が有意に少なく, 宗教否定群が有意に多いこと, 高齢層では, 宗教肯定群が有意に多く, 宗教否定群が有意に少ないことが示された。

度数の少ない群を除いた 2 つのクラスター群の平均に相

違があるかどうかを検討するため, t 検定を行った。青年層では, 無関心群と宗教否定群, 高齢層では, 宗教肯定群と無関心群で比較した。その結果, 青年層においては(表 13), 「主観的幸福感」($t(131)=1.902, p<.05$), 「満足感」($t(132)=1.752, p<.05$)に有意差が見られ, いずれの尺度も, 無関心群よりも宗教否定群の方が高い結果が得られた。

高齢層では(表 14), 「主観的幸福感」($t(90)=3.934, p<.001$), 「満足感」($t(91)=5.207, p<.001$), 「自信」($t(86.714)=3.122, p<.05$), 「達成感」($t(94)=1.767, p<.05$)に有意差が見られ, どの結果においても, 無関心群よりも宗教肯定群の方が高い結果が得られた。

表12 青年層と高齢者層におけるクラスター群の度数

	宗教肯定群	無関心群	宗教否定群
青年層	4	99	36
高齢者層	36	61	2

表13. 青年層の無関心群と宗教否定群の比較

	無関心群		宗教否定群		t 値
	M	SD	M	SD	
宗教行動	-0.434	0.818	-0.769	0.996	1.98*
宗教観	-0.09	0.369	-1.667	0.625	14.271***
スピリチュアリティ	-0.079	0.895	-0.292	1.571	0.768
主観的幸福感	35.81	6.636	38.46	8.205	-1.902*
満足感	13.78	2.757	14.83	3.769	-1.752*
自信	11.85	2.505	12.89	3.454	-1.657
達成感	4.86	1.378	4.94	1.603	-0.306
希望	5.35	1.438	5.69	1.91	-0.975

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表14. 高齢層の宗教信仰群と無関心群の比較

	宗教肯定群		無関心群		t 値
	M	SD	M	SD	
宗教行動	0.752	0.728	0.234	0.895	2.942*
宗教観	1.44	0.433	0.212	0.413	13.89***
スピリチュアリティ	0.546	0.938	-0.133	0.737	3.957***
主観的幸福感	42.94	4.188	38.86	5.248	3.934***
満足感	16.50	1.935	14.35	1.941	5.207***
自信	14.58	1.857	13.23	2.339	2.948*
達成感	5.5	1.134	5.08	1.109	1.767*
希望	6.36	1.222	6.07	0.989	1.225

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

考察

各尺度の因子構造と年代差・性差

主観的幸福感尺度を因子分析した結果、伊藤他(2003)の因子構造と同じ、「満足感」、「自信」、「達成感」、「希望」の4因子が抽出された。第4因子が低い信頼性を示したが、本研究の目的を鑑みて、すべての因子を使用することにした。また、宗教観尺度を因子分析の結果、金児(1993)とやや異なり、「向宗教性」、「靈魂観念」、「輪廻転生」、「宗教肯定」の4因子が抽出された。第4因子が低い信頼性を示したが、すべての因子を使用することにした。スピリチュアリティ現象尺度については、具志堅ら(2013)と同様3因子が抽出され、「人生の意味」、「未来期待」、「心象の現実化」という内容を含むことになり、信頼性は満足できるものであった。

各尺度の年代差をみると、高齢層の方が「主観的幸福感」が高く、人生の満足感が高く、生き方に自信をもち、人生での達成感や将来の希望をもち、宗教行動をより頻繁に行っていた。また宗教観では、宗教に価値を見出し、宗教的行事の重要性を感じ、宗教に肯定的感情をもち、人生の出来事に意味を見出す傾向が強い。NHK放送文化研究所(2009)の調査結果と同様、宗教に対するポジティブな態度は、青年層よりも高齢層の方が高い結果が得られた。「宗教行動」が青年層よりも高齢層の方が活発であるという結果も一致した。

性別では女性の方が、宗教行事等の意義をより強く感じ、死後の世界や生まれ変わりを信じており、女性の信仰率が高いというNHK放送文化研究所(2009)の結果と一致していた。また、金児(2003)と同様、「靈魂観念」と「輪廻転生」に女性のほうが高い結果となった。

宗教観、スピリチュアリティ、宗教行動と主観的幸福感の関連

相関分析から、宗教に対して肯定的な態度を持つほど、また、自己の人生をじっくり考えたり、未来に対して前向きな展望をもったり、自己の将来のイメージが実現するという意識を強くもつほど、自己や現状に満足し、自信をもち、幸福感が高い傾向があるといえる。

全体として、高齢層の方が青年層よりも多くの正の相関が見られ、スピリチュアリティと主観的幸福感の関連が強いことが認められた。一方、特に青年層では高齢者と比較し、「主観的幸福感」と「宗教行動」、「宗教観」との関連は弱いことが示された。また、両世代とも主観的

幸福感の「達成感」と「希望」は「宗教行動」、「宗教観」、「スピリチュアリティ」の関連は弱いことがみとめられた。青年層において、宗教への肯定的感情が強いと人生に対する幸福感も強いという関連が見られていることから、西沢(1998)とほぼ同様の結果が得られた。

「主観的幸福感」を従属変数、「宗教行動」、「宗教観」の「向宗教性」、「靈魂観念」、「輪廻転生」、「宗教肯定」、スピリチュアリティの「人生の意味」、「未来期待」、「心象の現実化」を独立変数として、青年層と高齢層別に重回帰分析を行った。

青年層では、宗教に対してポジティブな態度をもち将来に対する期待が強いほど幸福感が高いこと、一方、死後の世界を信じ来世への期待が強いほど幸福感が低いことが認められた。高齢層では、人生の出来事に意味を見出す傾向が強いほど、問題を解決できるという自信が強くなる傾向がみられた。今後、少子高齢化社会が加速的に進行する中、一人暮らしの高齢者は増えていく一方である。他者と関わる機会も少なく、社会的関係の中で幸福を感じる機会も限られている。本研究の結果から、人生を振り返ることで主観的幸福感を向上させることが示された。これは、回想法による高齢者支援を支持するものと考えられる。

高齢層の方が尺度間の正の相関が多くみられたことから、逆の因果関係を想定し、主観的幸福感を独立変数とし、宗教性とスピリチュアリティを従属変数として重回帰分析を行った。

青年においては、人生に対する満足感が高いと宗教を肯定的にとらえる傾向があるが、達成感が高いと宗教に対して否定的態度をもつ傾向がみられた。また、問題解決ができるという自信が強いと未来に対する期待や心の中で希望したことが現実化すると考える傾向がみられた。

一方、高齢層においては、人生に満足感を感じているほど、宗教に対する肯定的な態度や宗教的行事の重視、死後世界や生まれ変わりへの信心が促進された。また、宗教的行動が活性化し、人生の意味を考えたり、将来への期待や希望することはかなうという信念に正の影響を示した。人生に満足感をもち幸福感が高いことが、信仰心を高め宗教への積極的な態度に結び付くといえる。またスピリチュアリティについても、促進的な影響がみられた。幸福感が高く余裕をもって生活を送ることは、宗教に関する事柄以外にもポジティブな態度をもつとも考えられる。

宗教行動, 宗教観, スピリチュアリティのクラス タ分類と世代間比較

「宗教行動」, 「宗教観」, 「スピリチュアリティ」によるクラス分析の結果, ポジティブな宗教観をもつ宗教肯定群, 宗教性に特徴をもたない無関心群, 宗教観が最も低い宗教否定群の3群に分類された。各クラス群と世代の関連を検討したところ, 青年層では, 宗教否定群が宗教肯定群より多く, 高齢層では, 宗教肯定群が宗教否定群より多いことが示された。田中(1967)やNHK放送文化研究所(2009)と同様, 青年層の宗教信仰率の低さが認められた。

両世代で, クラス群間の主観的幸福感を比較検討したところ, 青年層では, 無関心群よりも宗教否定群の方が人生の幸福感を強くもっており, 満足感が高い結果が示された。この理由の1つとして, 無関心群に比べ, 宗教否定群は, 様々な事柄に積極的な態度表明ができるという点で幸福感を強く感じやすいと考えられる。また, 人生に対する幸福感や満足感が高いことによって, 宗教やスピリチュアリティに頼る必要がないとも考えられる。高齢層では, 「主観的幸福感」, 「満足感」, 「自信」, 「達成感」において, 無関心群よりも宗教肯定群の方が主観的幸福感が高い結果が得られた。この結果は, 西沢(1998)の結果と同様, 宗教性が主観的幸福感を向上させることを示している。

まとめと課題

青年層において, 宗教を肯定することや未来に期待を持つことで主観的幸福感が向上することが推察された。一方, 死後の世界を信じ来世を期待することは主観的幸福感を低下させることが示唆された。さらに, 宗教に無関心な青年より宗教を否定的にとらえる者の方が生活における満足感が高いことが示された。このことから, 宗教的信仰の有無に関わらず, 何らかの形で宗教に関わることによって「主観的幸福感」, 「満足感」を向上させることが推察される。以上の結果から, 青年層はスピリチュアリティの得点が高く, それが主観的幸福感を促進するという仮説は一部が支持されたといえる。

一方, 高齢層においては, 自分の人生の意味を考えることが主観的幸福感の促進的影響をもつことが推察された。しかし「主観的幸福感」に対して「宗教行動」, 「宗教観」の各尺度は強い影響を及ぼしていなかった。このことから, 高齢層では, 宗教の信仰の有無に関わらず, 自己の人生を振り返りその意味を考えることで主観的幸

福感を向上させるという結果は, エリクソン(Erickson, E.H.)の老年期の発達課題である「統合性対絶望」の意義を支持するものである。老年期において, 自己の人生を統合するという営みが幸福感をもたらすことが示唆された。以上のことから, 高齢者は, 宗教観と宗教行動の得点が高く, 主観的幸福感を促進するという仮説2は支持されなかった。

本研究から浮かび上がった課題を考えてみたい。第一に, スピリチュアリティの概念はあいまいであり(タカハシ, 2016), 定義の仕方によっては精神的健康の関連も影響されると考えられる。スピリチュアルな事柄として, 川上他(2010)のいう心霊現象などの不思議現象に対する意識・行動については, 青年層の方が活発であるとされている。これらの項目が精神的健康とどのような関連があるか興味深い課題である。

第二に, 青年層の宗教性・宗教行動が幸福感を促進するという関係性から高齢層の幸福感が宗教性・宗教行動に影響するという関連性に移行するのはなぜか, どのようなプロセスをたどるのかという問題がある。一つには, 高齢者は身近な人々との死別体験が多く, 葬儀や法事など宗教的活動に接する機会が多いことから, 宗教に関する理解が深まりポジティブな宗教性が形成されと考えられる。また, パーソナリティには, 加齢に伴う発達的な変化がみられ, 川本・小塩・阿部・坪田・平島・伊藤・谷(2015)が協調性と勤勉性が年齢に伴い上昇することを報告している。こうしたパーソナリティの変化が宗教性と関連する可能性が考えられ, 今後このような問題に取り組むことも必要であろう。

謝辞 :

調査に協力して頂きました高齢者の皆様及び大学生の皆様には厚く御礼申し上げます。

注 :

本論文は, 東海学院大学に提出された第一著者の平成29年度修士論文に基づき作成された。第30回日本発達心理学会(早稲田大学, 2019.3)において発表された。

引用文献 :

- ガバットジン, J./春木豊訳(2007) マインドフルネスストレス低減法 北大路書房
- 玄侑宗久(2014) 社会不安と宗教の移ろい 學鐙, 111, 22-25.

宗教性とスピリチュアリティ及び主観的幸福感の関連

- 具志堅伸隆(2009) 素朴な信仰心に関する基礎的研究(1) 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集,1104-1105.
- 具志堅伸隆・下家義弘(2010) 素朴な信仰心に関する基礎的研究(2) 日本心理学会第 74 回大会発表論文集,280.
- 具志堅伸隆(2010) 素朴な信仰心に関する基礎的研究(3) 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集,19,24.
- 具志堅伸隆(2011) 素朴な信仰心に関する基礎的研究(4)・「(短縮版)スピリチュアリティ的信念尺度」の作成および主観的幸福感との関連性についての検討 日本心理学会第 75 回大会発表論文集,103.
- 具志堅伸隆・松島公望・平子泰弘・徳野崇行・相澤秀生・酒井克也(2013) 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連；スピリチュアル現象にみる大学生の諸相(1) 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集,210.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至(2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究,74,276-281.
- 伊藤義徳・安藤治・勝倉りえこ (2009) 禅的瞑想プログラムを用いた集団トレーニングが精神的健康に及ぼす影響－認知的変容を媒介変数として－ 心身医学, 49,233-239.
- 金児暁嗣(1993) 日本人の民族宗教性とその伝播 心理学評論,36,460-496.
- 金児暁嗣(1997) 日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学 新曜社
- 金児暁嗣(2003) 日本における近代的価値観と宗教意識の変質 都市文化研究,1,23-35.
- 金児恵 (2004) 日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響：ISSP 調査の日米データの二次分析から 死生学研究,3,348-367.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之(2010) 不思議現象を信じる理由(1) 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,9,15-25.
- 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷伊織 (2015) ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差：大規模横断調査による検討 発達心理学研究, 26, 107-122.
- 松島公望(2005) 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発：プロテスタント教会一教派(ホーリネス教会)を対象にして 学校教育学研究論集,11,13-28.
- 松島公望 (2016) 序章 日本人の宗教性を測る－宗教を心理学するためのガイドライン 松島公望・川島大輔・西脇良 (2016) 宗教を心理学する－データから見えてくる日本人の宗教性 誠信書房
- 松島公望・小林正樹・宮下一博(2014) 宗教的実践が精神的健康(不安および主観的幸福)に与える影響－仏教系新宗教 A 教団信者における準実験研究－ 千葉大学教育学部研究紀要,62,107-115.
- 松島公望・川島大輔・西脇良(2016) 宗教を心理学する－データから見えてくる日本人の宗教性 誠信書房
- NHK 放送文化研究所(2009) “宗教的なもの” にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査(宗教)から～ 放送研究と調査(月報),5,66-81.
- NHK 放送文化研究所(2011) 男女間および年層間における意識差の変動状況～「日本人の意識」調査の結果から～ NHK 放送文化研究所年報,7-57.
- 西沢悟(1998) 宗教心理と精神健康・現代大学生について－学園論集,96,97,1-65.
- 小川真由(2012) 青年期の宗教性と生き方の関連(研究 I) 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要,6,51-60.
- 鈴木有美(2002) 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康：共感性およびストレス対処との関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・心理発達科学,49,145-155.
- タカハシマサミ (2016) 第 9 章 スピリチュアリティを心理学する－spirituality に混在する「厄介さ」と「可能性」の探求 松島公望・川島大輔・西脇良(2016) 宗教を心理学する－データから見えてくる日本人の宗教性 誠信書房
- 上田弓子(2014) 現代日本におけるスピリチュアリティについての一考察 教養デザイン研究論集,6,57-76.
- 宇佐美麗・田上恭子(2012) マインドフルネスと抑うつとの関連－自己制御の働きに着目して－弘前大学教育学部紀要,107,131-138.

The Relationship between Religiosity, Spirituality and Subjective Wellbeing

—A Comparative Study of University Students and Elderly People—

KOBAYASHI Akinori¹ and MIYAMOTO Kunio²

¹ Gifu City Board of Education, ²Tokai Gakuin University

Abstract

This study examined the influences of religious behavior, religious belief and spirituality on subjective wellbeing in university students and elderly people. The questionnaire survey we conducted showed that “expectations for future” and “affirmation of religion” facilitated subjective wellbeing and that “reincarnation” had a strong negative influence on university students, and suggested that religion is positively related to wellbeing in young people. In elderly people, on the other hand, “gratification” and “hope” of subjective wellbeing activated religious behavior, related to positive religious belief and spirituality. These results were discussed referring to the way of lives and mental states among gratified elderly people.

Keywords : Religious behavior, Religious belief, Spirituality, Subjective wellbeing